

## 「普通じゃない」はおかしい

交野市立第四中学校 二年 高谷 楓乃

この本は、主人公のめぐが生徒手帳に赤毛証明という印を押されたことから、「普通とは何か」について考えていく物語だ。

私は、この本を読んであることに気付かされた。

それは、人によって「普通」の定義が違うということだ。私は、よく「普通」という言葉を使うが、「普通」に入る境界線はどこに引かれているかがわからなかった。

しかし、この本を読むと、「普通」に入る境界線はとも曖昧で、人によって違うとわかった。

なぜこのことに気付いたかというところ、本の中の登場人物それぞれが自分自身の「普通」を持ち、それを誇っているからだ。

また、このことに気付いたからこそ、私の間違いにも気付くことができた。

それは、髪を赤く染めている、小学校中学年くらいの女の子を見たときのことだ。その女の子を見たとき、私は、「なんで髪を染めているのだろう」「髪を染めるなんて、普通じゃない」と思った。

しかし、それは間違いだとわかった。私が通う学校には、髪を染めてはいけないという校則がある。つまり、髪を染めたら、学校の中では「普通じゃない」ということだ。しかし、その女の子にとっては「普通」かもしれないのだ。勝手に私が「普通じゃない」と決めつけてしまうのは間違いだと思った。

このときの私は、私の「普通」を他人に押し付けて「普通」か「普通じゃない」かを判断していた。

私のように、思い込みで人を判断している人はたくさんいると思う。しかし、私がこの行為を間違っていると気付けたように、思い込みで人を判断している人も、きっかけさえあれば気付けると思う。私の場合は、この本だった。

こうやって、思い込みで人を判断することがなくなればいいと思う。

この社会では、髪の色のことだけでなくみんなから差別される人は少ないと思う。だからこそ、髪の色が黒色でない人は、周囲からは認められるものの、学校などの公共の場ではルールに縛られ、心の中で迷いが起こるのだろう。

髪の色の違い、肌の色の違い、言語の違い、宗教の違い、性同一性障害者。人それぞれにこのような違いがあつて、それを認められる社会。これを多様性社会と呼ぶ。いろんな髪の色があつていいじゃないか。一人一人が違うことが、当たり前じゃないか。私はこう考える。

結局、めぐは「普通とは何か」の答えを「自分らしいありのままの状態のこと」とした。「普通に生きる」ということは、「自分らしく生きる」ということだ。

私の「普通」は何だろう。これから、たくさんの人とふれあい、話しあつていくだろう。その中で、答えを見つけていけたらいいと思う。

でも、これだけはわかった。

「普通じゃない」は、おかしい。

「赤毛証明」

作 光丘 真理  
くもん出版

